三輪卓爾先生を想う

小曽戸　洋
北里研究所東洋医学総合研究所

尊敬する三輪卓爾先生が平成十八年十二月八日に満八十四歳でご逝去された由、私は暮の奥様からの喪中のご挨拶状で知り、ご葬儀に参列しなかった失礼を悔いたものである。ここに拙文を記して、三輪先生の御霊に追悼の意を表したい。

三輪先生は大正十一年一月一日にお生まれになった。昭和二十一年に東京大学医学部（内科）をご卒業になり、以後、昭和四十三年に東京女子医大講師、三和銀行東京診療所長、同五十一年に富国生命保険相互会社診療所長、同五十三年に東芝総合健診センター所長、同五十五年に順天堂大学非常勤講師を兼任、同六十一年には東芝中央病院と順天堂大学公衆衛生学、平成七年には東芝病院勤務、そして平成十七年、東芝病院顧問となられた。

医史学関係では、医学用語史、身体意識の歴史などにとくに興味をもたれ、研究を重ねられた。日本医史学会の役員としては、評議員（昭和五十三～五十九年）、監事（同五十九～平成二年）、理事（平成二～十四年）を歴任されておられる。

三輪先生との想い出といえば、多くは『日本医史学雑誌』の編集委員会に関係することである。

私が日本医史学会に入会したのは昭和五十三年。当時、慶應義塾大学の北里記念館で行われていた例会にはときどき出席させていただいたが、初めての例会発表は昭和五十六年十一月の順天堂大の教室でのことで、小川鼎三先生、緒方富雄先生、大鳥蘭三郎先生などの大先生の前でカチカチになってしまった。翌昭和五十七年には医

史学研究の研究員として北里研究所東洋医学総合研究所に採用していただき、大塚恭男先生に仕えることになった。

大塚恭男先生は三輪先生の東大医学部の後輩で、お二人は親しかった。私の記憶にある三輪先生との最も古い想い出は、昭和五十七～九年頃の日本医史学会総会後の懇親会でのこと（座敷だったことはよく覚えている）。ニコニコして温厚な三輪先生に大塚先生は私を「これはウチの医史学の小曽戸です。目をかけてやって下さい」旨、紹介して下さった。そして、大塚先生と三輪先生が親しくなったいきさつを「長崎で学会（昭和四十七年）をやったとき、夜二人で町に飲みに出かけて『青い鳥』という小さなバーに入ってね、二人で飲んで意気投合したんだよね。そしてはしごをしようと数軒行ったんだが面白くなく、ぐるぐる回ってもう一軒ということで最後に入った店が、気付いたら最初に入った『青い鳥』という店なんだよね。『青い鳥』ってほんとに最初からそばにいるもんなんだね」と語られた。当時、大塚先生は四十二歳、三輪先生は五十歳だったのである。この話は以後何度も聞かされた。

三輪先生は『日本医史学雑誌』二四巻一号すなわち昭和五十三年初めから編集委員になられた由である。私が『日本医史学雑誌』の編集委員を拝命したのは昭和六十一年の初めである。記録では、三二巻一号（昭和六一）の時点で、大塚恭男・石原力・酒井シヅ・三輪卓爾・矢部一郎（以上編集委員）・蔵方宏昌・深瀬泰旦（以上編集幹事）の諸先生だったのが、三二巻二号から、大村敏郎・蔵方・小曽戸・松下正明・三輪・矢部（全員編集委員）に変わった。編集委員長は明記していないが、互選で事実上は矢部先生が編集委員長となった。私は大塚先生から自分の後任として、矢部・三輪先生らに仕えるよう指示されたのである。さらに三四巻二号（昭和六三）からは、編集委員長は矢部、委員は大村・蔵方・小曽戸・三輪と明記され、雑誌奥付の編集者代表に大鳥蘭三郎とあったのが、矢部一郎に変更された。

昭和62年5月3日、伊豆下田の黒船観光ホテルの前で
（むかって左から、小曽戸・真柳・蔵方・大貫・矢部・平馬・三輪・大村・大塚・秋元）

昭和六十二年の日本医史学会総会は、大塚先生が会長、私が準備委員長となり、四月に北里の白金キャンパスで開催したが、開催経費を集計したところ結構な余剰金が出た。これ幸いとばかり、それを使って北里の準備委員会と編集委員会との合同で、伊豆下田の黒船観光ホテルに一泊旅行した（写真）。行きの列車から、夜はもちろんのこと、朝食から帰りの列車まで飲み続け。大騒ぎだった。あの頃は楽しかった。

三輪先生は平成二年、三六巻三号から編集委員長に就任され、それまで編集委員長だった矢部先生は理事から常任理事に昇格された。当時、常任理事と編集委員長は兼任しないという不文律があり、矢部先生は前者、三輪先生は後者を希望されたのである。長年、編集委員の一員を務めた経緯の中で、三輪先生はいつか

雑誌編集の長たらんとの想いが強かったのだと私は思う。編集長に就任されたとき、先生は若輩の私を呼び出され、銀座ライオンで二人で痛飲した。このときの三輪先生の気概ぶりは今も忘れられない。

三輪先生はその後、並々ならぬ情熱をもって編集の事にあたられた。その成果は当時の雑誌の変化を見ればわかるであろう。当時は投稿論文が少なく、雑誌の定期発行も危ぶまれるほどであったのだが、「地域の医学史」の特集を組むなどして何とか乗り切った。雑誌表紙に図版を入れるなどの工夫もその頃から始まった。

先生は責任感が強く、種々の事案の処理に心を砕かれたこと、私からみれば気の毒になることがしばしばあった。一日に何度も電話をかけてこられ、私まで気が塞ぐこともあった。今となっては尊敬するばかりである。先生は平成十年の四四巻二号まで、八年間、編集委員長を続けられ、以後、深瀬泰旦先生にバトンタッチして、編集委員会から完全に退かれた。

先生とは昔からよくお酒の席を共にさせていただいた。温厚ではあられたが、たまには叱られたこともある。想い出は尽きない。歳月の過ぎるのは早いものである。国鉄お茶の水駅東口近くの飲み屋（二階の店、店名は失念）や四谷のバー「ようこ」などでしょっちゅう御一緒した宗田一先生や大村敏郎先生も他界され、大塚先生・矢部先生とも懇談する機会はなくなってしまった。三輪先生は私より二十八歳も年上である。別離は世の定めとわかってはいても、現実のものとなると、いかにも寂しく、楽しかった昔がなつかしく想い出されてならない。

先生の御冥福を心からお祈りします。